

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Khoo Boo Teik
出身地：マレーシア
2009年6月からアジア経済研究所地域研究センター上席主任研究員

読み・書きに不自由せず弁舌に長けているのがあたり前とされる学者人生を歩んできた私であるが昨年六月、アジア経済研究所に移ってから凶らずも????な状態となった。比喩的な意味ではなく、日本語に關しては全く不自由となった。でもなんとかかんとか生活している。会話は英語の間にたどたどしく日本語を混ぜたり、身振り手振りで示したり、買い物ときは値札を頼りに、レストランでの注文はメニューの写真や英語の説明を頼りに、などなど。旅行者など短期滞在者で日本語がわからないと腹を立て意固地になつてしまうことも多かるう。私のように腰を落着かせてしまつと見知らぬ人から差し伸べられる親切やご厚意、職場の人や友達からの思いやりに触れることも多くそれはそれでいい経験となる。結果、「日本語を勉強するほかにあるまい」と決心するに至つた。段々わかつてくると興味も増す。平仮名を覚えたら日本語の神秘のベールが取り除かれた。以前はちんぷんかんぷんだった言葉が聞き取れるようになり、「ご出身は？」など単純な質問にも答えられるようになった。

単に音を聴きそれを繰り返す練習だけでなくいか内容を理解してから練習した方がよいか、判断に迷う。でも口を動かす訓練は必要だろ。今はまだ店員さんなどのやりとりについてゆけず「今、日本語勉強中です」とご容赦願つていらっしゃる段階だ。食器洗剤の代わりに漂白剤を買つてしまった事がある。ラベルに食器の写真があれば誰だつて普通の台所用洗剤と思うだろう。でもそんなことで機嫌をそこねてはいけない。「釣り」というとき「すり」といつてしまつたり、「受付」「机」「うつけ」などがまぜこぜになつてしまつたり自分でも笑つてしまふ。発声の高低、拍子、音の区切りなど日本人に近づくには呼吸法の練習も必要だ。日本語は確かにひとつの言語だが平仮名、カタカナ、漢字と三つに分かれている（ときとしてこれにローマ字が加わる）。これらが混在して長々と続くとなると読解は難事業となる。例えば東京駅のエスカレーターや乗継ぎの案内板。わかるのは最後の「下さい」のみ。あるとき友達が商店街をサインを頼りに案内してくれたとき、混乱した頭を落ち着かせるためのメソッドを見いだした。英語さえ知つていればカタカナを読めるようになる、何をさしているのか英語ベースで捉えられるようになるのだ。そこで広告チラシ、食べ物の名前、買い物袋、ジャンク・メールなどからカタカナを拾つて読むことを日課とするようになった。お陰で歩みはおそいが全くわからない状態から脱出しつつある。若者は、正確な聞き取り能力、本能的理解力、素早い記憶力があるから意欲的に言葉を学ぼうと

するが、年とともに能力も衰える。が、熟年からの勉強にも利点はある。いろいろなことを経験すると（というより自暴自棄に陥ると）独自の習得法を考えつくようになっていくようだ。私の場合、日本語を他の言語で周知の物事に結びつけるというやり方だ（言語学的にみて間違つていても知れないが）。もし頭から英語の知識を全部消去し母国語の福建語に切り替えられれば日本語はもっとスムーズに覚えられらう。福建語と日本語とは語彙や文法においてたくさん類似点があるため私の脳は西洋流の思考をやめることだらう。言葉の不自由について書くとき昔の記憶が蘇る。賢明で才能に恵まれていたにも関わらず学校に通う機会を奪われた母やペナンにいる古くからの隣人は貧しい中国からの移民であり理解できない言語にかまれば役人の目におびえ続けていた。マレーシアにおいておよそ二〇〇万人の移民労働者は、何ら正式な教育も受けないまま他国の言葉や方言を話さなければならなかった。かれらにとって言葉は死活問題であった。

ここで思い出されるのがUNESCOの「万人のための教育」宣言だ。その中に「成人の非識字率をゼロにする」、「生涯教育を支援する」という条項が盛り込まれている。言葉がわからないことを楽しもうとすれどやはり深刻な問題である。

カタコトもまた楽し

クー・ブー・テック